

## 保育士を目指す学生が抱える 不安と悩みの構造

片岡 祥\*

### Structure of the Anxiety and a Trouble Which the Student Who Aims at a Childcare Worker Holds

Sho KATAOKA\*

This research examined the trouble and an anxiety structure which the student who aims at a childcare worker holds. The participants were 79 childcare subject-of-study second grader women of a junior college. We collected about a student's trouble and anxiety using free description. There were taken out eight categories, "anxiety to human relations", "a child's instruction", "skill as a childcare worker", "continuation of work", "nature as a childcare worker", "workplace environment", "a child's trouble", and "condition management". This result was almost the same as a difficult structure which a new childcare worker holds. Based on the result, it had a discussion about the support according to each category.

**key words:** structure of the anxiety and a trouble, the student who aims at a childcare worker holds, free description

#### 問 題

保育士の業務は、園児の健康管理や教育上の指導に加えて、発達障害など集団への適応に困難を抱える子どもへの対応、保護者からのさまざまな相談への対応や、問題を抱えた家庭に対する関係諸機関との連携など、枚挙にいとまがない。そのため発達に関する知識や教育指導に関する能力だけでなく、カウンセラーやソーシャルワーカーとしての実務能力も必要となってくる。このように、保育士に求められる能力は、実に多岐にわたる。

もちろん、大学ではカリキュラムの中で保育士に必要なさまざまな能力を養成していくわけであるが、そのすべてを網羅するのは決して簡単なことではない。保育士を目指す学生がどのような領域に不安を感じ、悩みを抱えているのかを明らかにすることは、大学教育を最適化するうえで重要なことであろう。また、学生1人1人が抱える保育士への不安や悩みは、個人が認識している保育士技能の不

足領域と捉えることもできる。学生の苦手な領域について個別にアセスメントを行うことができれば、就職前の個別指導からより有能な保育士の育成に寄与することとなる。

さらに、保育士に不適格であると考えられる学生の中には、勉学の怠慢、さらには退学などの適応に関する問題とも関連してくることが予測される。改善可能なものであるにも関わらず、本人の希望進路を閉ざしてしまうような事態を未然に防ぐことは大学教育の中では重要なことと言えよう。

保育士を目指す学生に関する研究では、学生の保育士としての適性について検討したものは報告されているものの(藤村, 2010)、学生が持つ不安や悩みに関する報告はあまり見あたらない。そこで、学生とは異なるものの、立場的に近い新任保育士に関する知見を参考にする。新任保育士に関する研究では、新任保育士は“職場の人間関係”、“保育技能”、“勤務環境”という3つの領域に困難を抱えていることが指摘されている(加藤・安藤, 2012)。ここから、保育士を目指す学生においても抱える不安や悩みの構造はある程度同じであることが予想される。ただし、新任保育士とは異なり、保育士を目指す学生には特有の不安や悩みの領域があるのかもしれない。本研究では、特にこの点を念頭におきながら検討を行う。

以上を踏まえたうえで、本研究では保育士を目指す学生の不安と悩みの構造を明らかにする。就職が近い保育学科を専攻する短大2年生を対象に調査を行い、保育士への不安と悩みを自由記述から収集して分析を行うこととした。

#### 方 法

##### 調査時期

2013年9月に調査を行った。

##### 調査対象者

調査はA短大の保育学科2年次の女子学生79名を対象に行った。

##### 自由記述の項目

不安や心配事のような抽象的なものから、具体的な悩みまで幅広く収集するために2つの設問を用意し、回答してもらった。用意した設問は以下の2つであった。1. これから保育士となり活動していくにあたって、どのようなことに不安や心配を感じますか。2. これから保育士となり活動していくにあたって、具体的な悩みはありますか。

##### 手続きと倫理的配慮

調査方法は調査用紙を講義時間に配布し、集団的に実施した。その際、保育学生を対象とした保育職への考え方を問う調査であること、質問紙の回答は任意であり拒否しても構わないこと、回答途中であっても中断することができること、回答を拒否したり中断しても不利益が生じないこと、調査の結果は他人に口外しないこと、結果は統計的に処理され個人が特定される心配はないこと、といった倫理

\* 久留米大学比較文化研究所

Institute of Comparative Studies of International Cultures and Societies, Kurume University, 1635, Mii-machi, Kurume, Fukuoka 839-8502, Japan

現所属: 西南学院大学人間科学部

Department of Human Sciences, Seinan Gakuin University, 6-2-92 Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka 814-8511, Japan

Table 1 自由記述の分類結果

カテゴリー番号	カテゴリー名	アイテム数	割合 (%)	項目例
1	人間関係への不安	65	28.26%	保護者とうまくやっっているかどうか 職場の先生たちとうまく連携が取れるかどうか
2	子どもの指導	57	24.78%	子どもたちをきちんとまとめられるかどうか 子どもたちに良い指導ができるかどうか
3	保育士としての技能	40	17.39%	ピアノがしっかり弾けるかどうか 指導案や企画案を書くことができるかどうか
4	仕事の継続	16	6.96%	責任を持って保育士という仕事を続けられるかどうか 保育士という自覚を持ち、自立しているかどうか
5	保育士としての資質	14	6.09%	保育士として責任を持った行動ができるかどうか 子どもにきちんと善悪を伝えられるかどうか
6	職場環境	13	5.65%	休暇を確保できるかどうか 給料があまりもらえないのではないかと
7	子どものトラブル	10	4.35%	子ども同士の喧嘩を解決することができるかどうか 子どもがケガをした時に適切な対処ができるかどうか
8	体調管理	7	3.04%	体力が持つかどうか 持ち帰りの仕事をこなせるかどうか
	分類不能	8	3.48%	

的な配慮について書面と口頭で説明を行った。

### 結果と考察

#### KJ 法による記述の分類

収集した 230 の記述について、筆者と心理学の大学院生 2 人により KJ 法から分類を行った。その結果、8 つのカテゴリーに分類がなされた (Table 1)。

最も記述が多かったカテゴリーは、保護者や職場の人との人間関係であった。保育業務と言うよりは、広く一般青年に共通すると思われる内容が最も多かったことは興味深い。多くの場合、保護者や職場の人とは自分より年長の者となろう。このことから、対人関係全般に共通するコミュニケーションスキル、特に年長者との関わりに関するトレーニングや支援が必要と考える。

保育士業務と直接関連する内容は、第 2, 3, 5, 7 カテゴリーに見てとれる。子どもに対する指導や技能、トラブルへの対応といった園でのメイン業務の一つとなる子どもとの関わりやそれに付随するものであった。この領域に関しては、学生 1 人 1 人の不安や心配の程度や、得手不得手のはっきりしやすい領域といえる。個別のニーズに合わせた指導や支援が必要となろう。

残りの第 4, 6, 8 カテゴリーは保育士として働く際の環境や将来への展望に関する内容であった。過酷な労働の割に、給与面や体力面でのケアは十分とはいえない保育士の労働環境を反映していると言えるだろう。この点については、行政などの対応が望まれる領域であろう。

これらのカテゴリーは、新任保育士における 3 つの困難の領域（“職場の人間関係”、“保育技能”、“勤務環境”；加藤・安藤、2012）とほぼ重なるものと言える。新任保育士が抱える困難は、就労後に生じるものというよりは、すでに保育士を目指す学生の頃から存在していると推測した。本研究は大学教育への取り組みや改善を念頭に行ったものであったが、本研究で得た結果は大学教育のみならず、学

生が就職して保育士となった後にも関連してくる内容である。その意味で、今後の展開次第では、大学教育から現場までをつなぐ可能性がある意義ある知見と言える。

#### 本研究のまとめと今後の展望

本研究は、保育士を目指す学生の不安と悩みの構造を明らかにすることを目的として行った。その結果、8 つのカテゴリーが見出された。

本研究の限界点としては、以下のことが挙げられる。調査を行った大学が 1 校のみであったことから、結果の一般化には一定の留意が必要であろう。今後は、複数の大学の学生を対象として調査を行い、結果の精度を高めていくことが重要である。

本研究を踏まえたうえで、今後の展開として以下の二つを行っていきたい。第 1 に、収集した項目からなる尺度の作成である。尺度作成は、保育士を目指す学生の抱える問題の構造を把握するだけでなく、スクリーニング測定としての使用などの用途から有用であろう。第 2 に、作成した尺度を用いて大学適応との関連や、学年の違いによる不安や悩みの変化の検討が挙げられる。この点を明らかにすることは、大学教育へ有益な貢献を行う可能性が高い。今後は、項目を作成し、上記に挙げた二つの研究テーマについて取り組んでいきたい。

#### 引用文献

- 藤村和久 2010 保育士、幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 9, 129-143.  
加藤由美・安藤美華代 2012 新任保育者の抱える困難に関する研究の動向と展望 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 151, 23-32.

(受稿：2013.12.14; 受理：2014.3.3)